

平成26年度  
広島市教育センター

## 小学校体育科ボール運動領域における 学習意欲を高める実践的研究

—学習意欲の構成因子を高める指導の工夫を通して—

広島市立東野小学校教諭 大庭浩一

### 研究の要約

本研究は、小学校第5学年体育科「ソフトバレーボール」において、学習意欲を高める指導の工夫について考察したものである。文献研究から、体育科における学習意欲は、7つの因子で構成されていることや体育の内容である運動は、「1つの固有なおもしろい世界」としてとらえ、中でも『他者』とのかかわりを工夫することは、子どもにとっての運動の世界を広げることが分かった。そこで、本研究では、学習意欲を構造的にとらえ、学習意欲の因子を高める指導の工夫を取り入れた授業を計画し、実践を行った。その結果、学習意欲の3因子（学習の規範的態度・困難の克服・学習のストラテジー）を高める指導の工夫を行うことで、学習意欲の1因子（運動の価値）を高めることができた。このことから、運動の価値を高める具体的な指導の工夫として、M-T-Mメソッドやルール設定、学習カードといった手立てが有効であることが分かった。

キーワード：学習意欲、指導の工夫、ルール設定、M-T-Mメソッド、学習カード

## I 問題の所在

改正された教育基本法と学校教育法では、学習意欲をはぐくむことを明確に位置付けている。教育基本法第6条2項には、「自ら進んで学習に取り組む意欲を高めることを重視して行わなければならない」と、学校教育法第30条2項には、「主体的に学習に取り組む態度を養うことに特に意を用いなければならない」とそれぞれ規定されている。

平成20年1月の中央教育審議会の答申において示された体育科の改善の基本方針には、「豊かなスポーツライフを実現することを重視し改善を図る」<sup>1)</sup>とある。つまり、「学校教育は、学校体育だけで完結するのではなく、生涯にわたって運動に親しむための素地を育てる立場であることを明確にした」<sup>2)</sup>と白旗(2012)は見解を示している。

また、西田(2004)は、「高齢化、情報化、国際化を控えた21世紀の社会に対応していくためには、生涯を通じて主体的に学び続ける意欲や能力を備えた人間の育成が求められている」<sup>3)</sup>と述べ、生涯にわたっての学習意欲の必要性を述べている。

しかし、自らの体育科実践を振り返ると、技の出来映えや記録の伸びばかりに着目し、練習を繰り返すような指導を行っていた。よって、児童の学習意欲は、「できる」か「できない」か、または、記録が「伸びた」か「伸びなかった」かで大きく変容していたのではないかと推察される。

一方、『全国体力・運動能力、運動習慣等調査結果』文科省(平成26年)によると、体育・保健体育の授業で「できなかったことができるようになった」きっかけとしては、児童生徒ともに、「友達に教えてもらった」「先生や友達のまねをした。」という上位の回答が得られているように、技能を高める上では、人とのかかわりの必要性が高いことが示されている。

自身の実践では、児童相互のかかわりを取り入れた授業を行ってはいた。しかし、何のためにかかわりを取り入れるのか、かかわりを通して、どのような力がつくことにつながるのかという理解が、私自身十分ではなかった。

つまり、授業を通して、児童の学習意欲を高めるために必要な指導の手立てが十分ではなく、かかわりの重要性・有効性を十分に認識しないまま授業を行っていた。

そこで、文献研究等で体育科における学習意欲とはどのようなものかを明らかにし、人のかかわりを視点において、学習意欲を高めるための具体的な指導の手立てを考えていきたい。

そして、授業を通して体育科における学習意欲を高めることが、生涯にわたって運動に親しむための素地を育てることにつながるのではないかと考えた。

## II 研究の目的

小学校体育科において、人のかかわりを通して学習意欲を高める指導の工夫を探る。

## III 研究の方法

- 1 基礎的研究
- 2 研究仮説の設定
- 3 検証授業の計画・実践
- 4 実践についての分析と考察

## IV 研究の内容

### 1 基礎的研究

#### (1) 体育における学習意欲とは何か

西田は、体育における学習意欲とは、「体育における学習活動を自発的・積極的に推進させ、

それらの学習を一定の卓越した水準にまで到達させようとする内発的動機づけ<sup>4)</sup>であると定義し、「一般的な達成動機づけが体育学習への興味や知的好奇心のような情緒的要因、体育学習に対する価値観、必要性、目的意識などの価値的要因、運動能力の自己評価といった認知的要因、過去の成功や失敗などの経験的要因によって体育学習に方向づけられたものである<sup>4)</sup>と考えている。

また、西田は図1のように「体育における学習意欲を規定する期待・感情モデル」<sup>5)</sup>を提起し、二次的要因が一次的要因を規定し、一次的要因が、最終的に体育における学習意欲を規定するとしている。

このことから、人とのかかわりが体育における学習意欲を高める要因の一つになることを示していると考えられる。

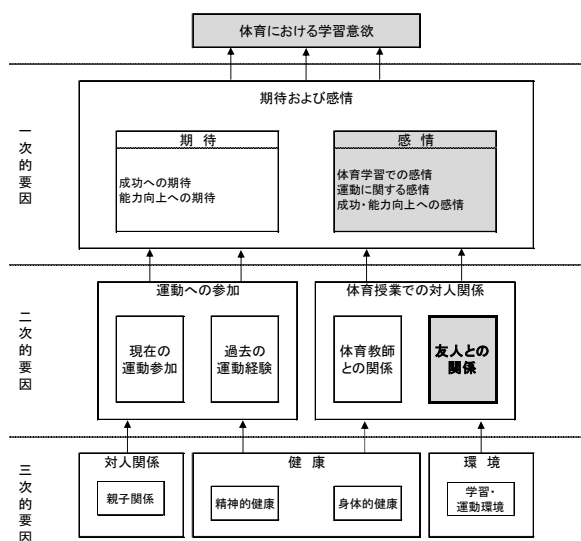


図1 体育における学習意欲を規定する期待・感情モデル

## (2) 「世界」として運動をとらえる

松田 (2001) は、体育の内容である運動を図2のように「1つの固有なおもしろい世界」<sup>6)</sup>としてとらえる必要性を述べている。

このようにとらえてこそ、「子どもたちが、これまで以上にもっと運動を楽しむ力をつけ

たり、見知らぬ人とでも生涯にわたって運動を夢中になって楽しむことができたりする力を育む体育を考える糸口がでてくる」<sup>6)</sup>としている。

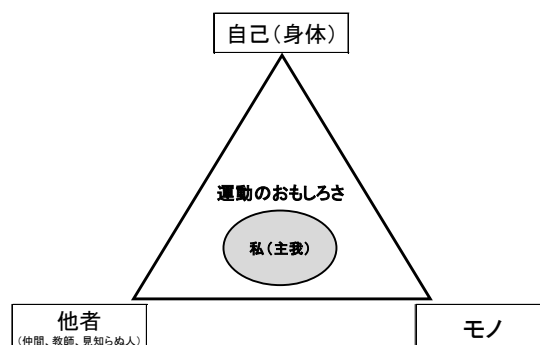


図2 「世界」としての運動のとらえ方

そして、その「世界の三角形の頂点になっている『自己』『他者』『モノ』のどれかを内側から伸ばすことができれば、三角形自体が広がり、面積も大きくなる、つまり子どもにとっての運動が広がり深まることになる」としている。

また、学習のねらいを、「この3つの頂点のどれかを学習者である一人一人の子どもが工夫する」<sup>7)</sup>という視点から定める必要性を述べている。

特に、学習の主体である「私」が『他者』を工夫するとは、『他者』との関係の在り方を変化させることを「手がかり」にするということとし、それは「遊び方、行い方の工夫」や「ルールの工夫」として表れるものであるとした。そうすることで、子どもは『他者』との新しい関係づくりを行い、遊びや運動の世界の「おもしろさ」を広げることができると述べている。

つまり、人とのかかわりは、「私」の運動の「世界」を広げると示唆していると考える。

## (3) 学習意欲の向上に資する因子について

西田は、体育の学習における学習意欲を7因子により構成できるとした。その7因子とは、体育学習を促進させる5つの意欲的側面と体育学習を抑制する2つの回避的側面で構成さ

れるとしている。

5つの意欲的側面とは、学習のストラテジー、困難の克服、学習の規範的態度、運動の有能感、学習の価値であることを示している。また、2つの回避的側面とは、緊張性不安、失敗不安であることを示している。

#### (4) 体育の学習意欲を構造的にとらえる

本研究においては、意欲的側面の5因子に焦点を絞り、5因子を高めるための指導の工夫を探ることとした。そして、基礎的研究をもとにして、図3のように体育における学習意欲を構造化してとらえることにした。

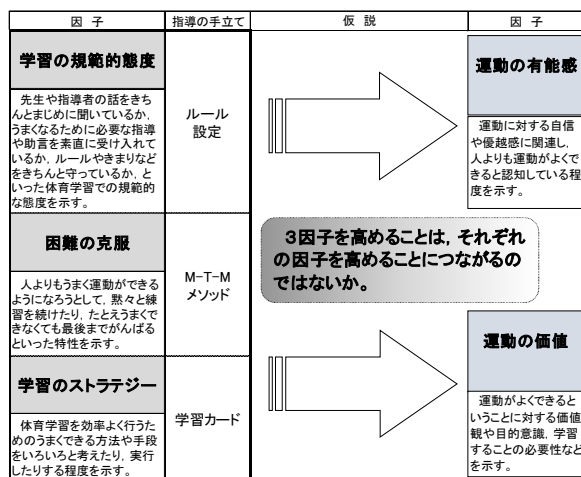


図3 学習意欲の構造化と仮説へのつながり

まず、学習の規範的態度を高めるために、ルール設定を手立てとして取り入れることとした。これは、松田のいうところの「ルールの工夫」にあたりと考えた。

次に、困難の克服を高めるために、M-T-Mメソッドを手立てとして取り入れることとした。これは、松田のいうところの「行い方の工夫」にあたりと考えた。M-T-Mメソッドとは、Match-Training-Match という意味がある。まず、試合 (Match) を行う。その試合の中から自分たちの課題を見付け、その課題を解決するために、ドリル練習を行ったり、作戦を考えたりする (Training)。そして、それを反映させた試

合 (Match) を行う。このような練習スタイルのことをM-T-Mメソッドという。それを単位時間の中で行っていく。

最後に、学習のストラテジーを高めるために、学習カードを手立てとして取り入れることとした。これも、松田のいうところの「行い方の工夫」にあたりと考えた。

つまり、体育科における学習意欲の「学習の規範的態度・困難の克服・学習のストラテジー」(以下、3因子という)を指導の工夫によって高めることができれば、「運動の有能感・運動の価値」(以下、2因子という)をそれぞれ高めることができるのではないかと考えた。

## 2 研究仮説の設定

単元を通して、体育科における学習意欲の3因子を指導の工夫によって高めることができれば、他の2因子をそれぞれ高めることができるであろう。

## 3 検証授業の計画・実践

### (1) 事前の質問紙調査

児童の学習意欲に関する実態を把握するために西田の学習意欲検査を用い、5件法で質問調査した。表1は、その一部である。なお、児童の実態に応じて、質問項目を一部抽出し、全25項目で行った。

表1 学習意欲検査の質問項目 (一部抜粋)

因子	質問項目	よくあてはまる	ややあてはまる	どちらともいえない	あまりあてはまらない	ほとんどあてはまらない
学習のストラテジー	自分のよい点や悪い点をよく考えながら運動している。	5	4	3	2	1
困難の克服	あれこれと考えるよりも、とにかく何回も練習する方だ。	5	4	3	2	1
学習の規範的態度	体育の授業中、きめられたことをきちんとまじめに練習している。	5	4	3	2	1
運動の有能感	人よりも上手く運動ができてほめられることが多かった。	5	4	3	2	1
学習の価値	運動が上手にできるということは、非常に大切だと考えている。	5	4	3	2	1

表2 単元計画

全8時間	第1時	第2時	第3時	第4時	第5時	第6時	第7時	第8時
主な学習活動	オリエンテーション	基本的な技能の習得をする		ルールの工夫を考えて、ゲームを行う		作戦を立てて、ゲームを行う		ゲーム大会
	<b>ルール設定</b>							
学習のめあて	学習のすすめ方を知り、ソフトバレーボールを使った運動を楽しもう	上手くできるためのコツを知り、アンダーハンドパスができるようになるろう	上手くできるためのコツを知り、オーバーハンドパスができるようになるろう	みんなが楽しむことができるゲームをするために、ルールを工夫しよう	みんながもっと楽しむことができるゲームをするために、ルールを工夫しよう	チームの特徴をもとに、せめ方や守り方の作戦を立てよう	チームの特徴をもとに、せめ方や守り方の作戦を立てよう	学習したことを生かして、ソフトバレーボール大会をしよう
チーム編成	単元を通して、同じチームで活動する。また、ペアチームを定めて対戦を継続させる。							
授業時間	用具の準備、集合、挨拶							
5	準備運動(ソフトバレーボールの基礎感覚や基本技能の習得をねらいとする)、 <b>前時の振り返り</b> 、本時のめあての確認							
10	基礎技能が上手くできるコツを知る		みんなが楽しむことができるゲームのルールを考える		チームの特徴をもとに、チームの方針やフォーメーションを考える		ルール・大会形式の確認	
15	準備運動(手つなぎ鬼ごっこ)	基礎技能のコツを知り、練習をする		試しのゲームをする		試しのゲームをする		ゲーム(1回戦)
20	さらに上手くできるためのコツについて話し合い、新たなコツを知る		試しのゲームをもとに、課題を見つけ、ルールの工夫を行う。		変更課題を随時可能にしたルール	試しのゲームを振り返り、課題を見付けたり、練習を行ったりする		作戦タイム
25	さらに上手くできるためのコツを知り、練習をする		まとめのゲームをする			まとめのゲームをする		ゲーム(2回戦)
30	ゲームをする							作戦タイム
35	・フリータイム ・ラリーゲーム							ゲーム(3回戦)
<b>M-T-Mメソッドの実践</b>								
40	整理運動						整理運動・振り返り表彰	
<b>学習カードによる振り返り</b>								
45	用具の片付け							

(2) 検証授業

ア 日時

平成26年12月8日～18日

イ 場所・対象

広島市立東野小学校 第5学年1組 28

名

ウ 単元

ボール運動「ネット型」(ソフトバレーボール)

エ 目標

- 簡易化されたゲームで、チームの連係による攻撃や守備をするための動きができるようにする。【技能】
- 運動に進んで取り組み、友達と助け合って運動をすることができるようにする。  
【態度】
- ルールを工夫したり、自分のチームの特徴に合った作戦を立てたりすることができるようにする。【思考・判断】

オ 指導の工夫

学習意欲の3因子を高めるための具体的な指導の手立てとして以下の3点を設定し、表2のように単元計画を考えた。

(ア) M-T-Mメソッド

困難の克服を高める手立てとして考えた。詳細については、既述したとおりである。

(イ) ルール設定

学習の規範的態度を高める手立てとして考えた。これは、ゲームで生まれた課題をもとに、児童相互で話し合い、ルールの工夫を行うものである。

例えば、扱うボールの重さを変える(100g, 50g, 30gから選択)、相手コートにボールを返すときに、ボールに触れる数を変更するということのように、みんながゲームを楽しめるようにという視点で、ルールの変更ができるようにした。そうすることで、ボールが扱いやすくなったり、ゆとりをもって相手コー

トにボールを返すことができたりすることにつながり、みんながゲームを楽しむことができるようになるのではないかと考えた。

#### (4) 学習カード

学習のストラテジーを高める手立てとして考えた。学習カードを使用する目的は、以下の2点である。

##### ① 本時のめあてに沿った振り返り

毎時間、本時の課題に沿った振り返りをしやすくするために、記述する文例を示した。それは、本時のめあての達成状況に対して、焦点を絞った振り返りをしやすくすることができるのではないかと考えた。

##### ② 課題意識の継続化

めあてに沿った振り返りを記述することで、本時で学んだことを整理する。

その振り返りを次時の始めに共有することで、学級全体で課題意識の継続化を図ることができると考えた。

そして、それを積み重ねることによって、単元を通して、自己の課題を明確にしたり、取り組んだりすることにつながると考えた。

#### (3) 事後の質問紙調査

検証授業の変容を測定するため、事前調査と同じものを行った。(表1)

### 4 実践についての分析と考察

#### (1) 学級全体の学習意欲の変容

表3は、西田の学習意欲検査を活用した児童28名の学習意欲の変容を示すものである。学習前と学習後の各因子の平均値、標準偏差とt検定の結果を示した。

表3 学級全体の学習意欲の変容

因子	学習前		学習後		t値	p値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
学習のストラテジー	18.89	3.88	20.18	3.96	-2.8330 ***	0.0043
困難の克服	19.43	4.08	20.82	3.64	-3.0596 ***	0.0025
学習の規範的態度	20.68	3.47	22.11	2.65	-2.5741 ***	0.0079
運動の有能感	14.61	5.65	15.11	5.05	-0.8321	0.2063
学習の価値	20.93	3.21	21.82	3.64	-2.0847 *	0.0233
合計	94.54	15.27	100.04	13.89	-3.5017 ***	0.0008

(n=28)  
(\*p<.05, \*\*p<.01, \*\*\*p<.001)

その結果、学習のストラテジー、困難の克服、学習の規範的態度、学習の価値においての数値が上昇し、有意差が認められた。運動の有能感については、有意な差は認められなかったが、学習前と比較すると数値の上昇はみられた。また、5つの尺度を総合した意欲的側面は、数値が上昇し、有意な差が認められる結果となった。

#### (2) ルール設定を手立てとした学習の規範的態度の変容(抽出児A児の分析を通して)

表4のよう、学習の規範的態度が大きく向上した抽出児A児に焦点をあてた。ルール設定を手立てとした学習の規範的態度の変容について分析・考察を行いたい。

表4 抽出児A児の変容

因子	質問番号	質問内容	学習前	学習後
学習の規範的態度	3	体育の授業中、決められたことをきちんとまじめに練習している。	3	5
	10	みんなで決めたことは、きちんと守って運動している。	2	5
	17	先生や指導者の話をしっかり聞いている。	5	5
	24	体育の授業は、人よりもまじめにうけているほうである。	2	2
	31	運動するときには、きまりやルールをきちんと守っている。	2	4
		計	14	21

学習前と比較し合計で、7ポイントの数値の上昇がみられる。特に「みんなで決めたことは、きちんと守って運動している」の項目の点数が大きく上がっている。

表5は、抽出児A児の学習カードのふり返しである。

表5 抽出児A児の学習カード

時間	学習のめあて	ふり返し(主な記述)
----	--------	------------

第4時	みんなが楽しむことができるゲームをするためにルールを工夫しよう。	サーブのルールを1人何回というのにしたら、みんな均等に投げられて楽しいと思う。↓
第5時		みんなが楽しめるように、サーブのやり方を変えたのでみんなが楽しくできた。

授業では、ボールの重さ、ボールを相手コートに返す回数、サーブについてグループで話し合い、ルールの工夫を行ってよいとしていた。これまでの授業で、サーブがうまく打てないという実態が、A児を含めて同じチームに2人みられた。そこで、A児は、第4時のゲームで生じた課題（サーブの回数が均等でないこと）を生かし、第5時において、サーブのルールを工夫する提案をした。そして、友達と話し合い、「投げてもよい・機会の均等」といった実態に合ったルールを設定した。その結果、「みんなが楽しくできた」と記述している。実態に合ったルールを設定できたことで、運動を楽しむことにつながったのではないかと考えられる。

つまり、ルール設定という指導の工夫が、A児にとって、学習の規範的態度を高めることの一因になったと考えられる。

表6 学習の規範的態度の変容

因子	質問内容	学習前	学習後	t値	p値
学習の規範的態度	3 体育の授業中、決められたことをきちんとまじめに練習している。	4.25	4.64	-2.4993 **	0.0094
	10 みんなで決めたことは、きちんと守って運動している。	4.25	4.61	-2.4227 *	0.0112
	17 先生や指導者の話をしっかり聞いている。	4.32	4.54	-1.2946	0.1032
	24 体育の授業は、人よりもまじめにうけているほうである。	3.47	3.75	-1.7693 *	0.0441
	31 運動するときには、きまりやルールをきちんと守っている。	4.39	4.57	-1.1538	0.1293
計		20.68	22.11	-2.5741 ***	0.0079

(\*p<.05, \*\*p<.01, \*\*\*p<.001)

学級全体の学習の規範的態度の変容は、表6に示す通りである。全質問項目に数値の上昇がみられた。

よって、ルール設定を手立てとした指導の

工夫は、学習の規範的態度を高めるために有効であったと考えられる。

### (3) M-T-Mメソッドを手立てとした困難の克服の変容（抽出児B児の分析を通して）

学習前アンケートで、「体育がきらい」と回答したB児に焦点をあてた。M-T-Mメソッドを手立てとした困難の克服の変容について分析・考察を行いたい。

表7 B児の学習カードへの記述

時間	学習のめあて	学習カードへの記述内容
第6時	チームの特徴をもとに、せめ方や守り方の作戦を立てよう。	フォーメーションは、△型から▽型にした。そうすると、途中から3回から2回でボールを返すことができた。すると、点が取れるようになった。

表7は、B児が第6時に学習カードへ記述した内容である。

B児のチームは、点が取れないという課題があった。しかし、フォーメーションを変更することで、点が取れたことを記述している。上手くいかなかったことが、試合と試合の間に行った作戦タイムによって上手くいったと考えられる。言いかえると、試合で生じた課題に対して、チームで課題を克服するために考えたり、練習をしたりすることができ、その課題を試合で解消するという達成感を味わうことができたのではないかと考えられる。このような記述は、他の児童にもみられた。

つまり、M-T-Mメソッドという指導の工夫が、B児にとって、困難の克服を高めることの一因になったと考えられる。

表8 困難の克服の変容

因子	質問内容	学習前	学習後	t値	p値
困難の克服	2 あれこれと考えるよりも、とにかく何回も練習するほうだ。	3.86	4.14	-1.6859	0.0517
	9 運動が上手になるためには、何回も繰り返し練習する。	3.96	4.14	-1.2234	0.1159
	16 苦手な運動でも、上手くなろうと一生懸命努力する。	4.04	4.25	-1.5360	0.0681
	23 たとえ運動が上手くできなかったとしても、あきらめずに最後までがんばっている。	4.14	4.47	-1.9709 *	0.0295
	30 運動が上手くできるまで、ねばり強くコツコツと努力するほうである。	3.43	3.82	-2.1744 *	0.0193
計		19.43	20.82	-3.0596 ***	0.0025

(\*p<.05, \*\*\*p<.001)

とができたと考えられる。

つまり、学習カードという指導の工夫が、C児にとって、学習のストラテジーを高めることの一因になったと考えられる。

学級全体の困難の克服の変容は、表8に示す通りである。全質問項目に数値の上昇がみられた。

よって、M・T・Mメソッドを手立てとした指導の工夫は、困難の克服を高めるために有効であったと考えられる。

#### (4) 学習カードを手立てとした学習のストラテジーの変容 (抽出児C児の分析を通して)

運動技能は非常に高いが、事前調査で質問項目⑮(表9)の低さが気になったC児に焦点をあてた。そして、学習カードを手立てとした学習のストラテジーの変容について分析・考察を行いたい。

表9 抽出児C児の学習カードの記述と学習のストラテジー因子との関連

因子	番号	質問内容	時間	めあて	ふり返り(文例)	ふり返り(主な記述)	学習前	学習後
学習のストラテジー	15	上手くできる方法をよく考えてから、運動するようにしている。	第2時	上手くできるためのコツを知り、アンダーハンドパスができるようになる。	・ ～に注意して、アンダーハンドパスができた。 ・ ～したけど、できなかった。今度は、～を意識して練習したい。	・ 肘を伸ばすことばかりを意識していると、ひざが曲げることができていないことに気付いた。2つのことを意識してやりたい。	2	5
			第3時	上手くできるためのコツを知り、オーバーハンドパスができるようになる。	・ ～に注意して、オーバーハンドパスができた。 ・ ～したけど、できなかった。今度は、～を意識して練習したい。	・ ボールばかりを見ていると手が三角形の形になっていないことがあった。次からも気を付けて練習したい。		

表9は、抽出児C児の学習カードの記述と学習のストラテジー因子との関連を示したものである。C児の質問項目⑮は、学習前と比較して3ポイントの数値の上昇を示した。

第2、3時は、ソフトバレーボールの基礎的な技能を高めることを中心に授業を行った。C児は、上手く出来たことや課題について、客観的に振り返りを行っていると考えられる。そして、上手くできる方法を探り、課題意識を継続しながら練習を行っていくこ

表10 学習のストラテジーの変容

因子	質問内容	学習前	学習後	t値	p値
学習のストラテジー	1 自分の良い点や悪い点を良く考えながら運動している。	4.07	4.39	-2.3530 *	0.0131
	8 どうすれば上手くできるか、あれこれと考えながら運動している。	3.89	4.11	-1.1852	0.1231
	15 上手くできる方法をよく考えてから、運動するようにしている。	3.5	3.72	-1.0995	0.1406
	22 体育の授業では、上手にできる人のまねをするなど、いろいろと工夫している。	3.75	4	-1.4912	0.0738
	29 上手くできなかった原因をよく考えてから、次の運動をするようにしている。	3.68	3.96	-1.4922	0.0736
計		18.89	20.18	-2.8330 ***	0.0043

n=28  
(\*p<.05, \*\*\*p<.001)

学級全体の学習のストラテジーの変容は、表10に示す通りである。全質問項目に数値の上昇がみられた。

よって、学習カードを手立てとした指導の工夫は、学習のストラテジーを高めるために有効であったと考えられる。

#### (5) 因子の相関についての分析・考察

最後に、仮説に基づいて、因子の相関に関する分析・考察を行った。

表11 3因子と2因子との相関係数

		運動の価値	t値	p値
学習の規範的態度	困難の克服	0.62	3.5885 **	0.0014
	学習のストラテジー	0.38	2.0697 *	0.0485

(Pearsonの積率相関係数)  
n=28  
(\*p<.05, \*\*p<.01)

表11は、3因子と2因子との相関係数を求め、無相関検定を行ったものである。

結果として、3因子と「運動の価値」には、有意な正の相関が認められるとともに、中程度の相関があるということが分かった。

しかし、3因子と「運動の有能感」には、



有意な正の相関は認められたものの、弱い相関しか認められないことが分かった。

因子	指導の手立て	結論	因子
学習の規範的態度	ルール設定	相関係数 0.38 弱い相関	運動の有能感
困難の克服	M-T-M メソッド	相関係数 0.62 中程度の相関	運動の価値
学習のストラテジー	学習カード		

図4 因子の相関関係

よって、図4のように「学習の規範的態度・困難の克服・学習のストラテジー」の3因子を高めることは、「運動の価値」を高めることにつながるのではないかと推察されるが、「運動の有能感」を高めることにはつながりにくいのではないかと推察される。

## V 研究のまとめ

### 1 成果

本研究では、体育科における学習意欲の3因子（学習の規範的態度・困難の克服・学習のストラテジー）を高めるための指導の工夫を行うことにより、1因子（運動の価値）を高めることができた。また、両者には、有意な正の相関が認められるとともに、中程度の相関があるということも分かった。

そして、学習の規範的態度や困難の克服、学習のストラテジーを高める具体的な指導の手立てとして、ルール設定やM-T-Mメソッド、学習カードが有効であることが分かった。

また、意欲的側面の5項目中4項目で、数値の上昇とともに有意な差も認められ、体育科における児童の学習意欲が向上した。

### 2 課題

今後の課題として、運動の有能感を高めるための手立ての在り方を探っていくことが

挙げられる。

しかし、運動の有能感は、運動に対する自信や優越感に関連し、人よりも運動がよくてできると認知している程度を示すものである。よって、短期の研究では、子どもの意識は変わらないという先行研究から、本研究でも同じような結果がみられた。つまり、今回の実践を長期的に繰り返していくことで変わる可能性があると考えられる。

よって、運動の有能感を高める具体的な方策を検討し、系統的かつ継続的な指導を行っていく必要があるのではないかと考えている。

また、学習意欲の因子を高めるためのより有効な指導の手立てについて探り、実践においてその有効性を明らかにしていく。そうした授業実践を重ねていくことで、体育科における児童の学習意欲を高める方法をさらに見出していくことができるのではないかと考えている。

### 引用文献

- 1) 文部科学省『小学校学習指導要領解説体育編』東洋館出版社、2008年、3頁
- 2) 白旗和也『体育の基本』東洋館出版社、2012年、15-16頁
- 3) 西田保『期待・感情モデルによる体育における学習意欲の喚起に関する研究』杏林書院、2004年、2-3頁
- 4) 西田保『期待・感情モデルによる体育における学習意欲の喚起に関する研究』杏林書院、2004年、10頁
- 5) 西田保『期待・感情モデルによる体育における学習意欲の喚起に関する研究』杏林書院、2004年、66-70頁
- 6) 松田恵示 山本俊彦『「かかわり」を大切に  
した小学校体育の365日』教育出版、2001年、4-5頁
- 7) 松田恵示 山本俊彦『「かかわり」を大切に

に

した小学校体育の 365 日』教育出版, 2001  
年, 11-12 頁

### 参考文献

- ⑧ 文部科学省『全国体力・運動能力, 運動習慣  
等調査結果』文科省ホームページ, 平成 26  
年
- ⑨ 西田保『期待・感情モデルによる 体育に  
おける学習意欲の喚起に関する研究』杏林書院,  
2004 年
- ⑩松田恵示 山本俊彦『「かかわり」を大切に  
した小学校体育の 365 日』教育出版, 2001  
年